

スタッフルーム
Staff room

我が家の生き物遍歴

はら なおみ
原 直実

(メディアセンター本部主任)

先日自宅の片付けをし、もう使わなくなった実用書を処分することにした。その中に動物の飼育関連の本があり、これまで共に暮らした動物のことが思い出された。

実家を出てから初めて共に暮らした動物はカラスである。怪我をしていたカラスの幼鳥を夫が保護したのは、結婚してすぐの時だった。私は鳥の飼育経験はなく、夫はインコしか経験していない。野鳥ゆえに飼育に関する本は見つからず、一般向けにカラスの生態を解説する本しか入手できなかった。Webで保護経験のある人のサイトを見つけ、大いに参考にさせてもらった。本来は怪我が治った時点で放鳥すべきだったのかもしれないが、諸事情により関係機関にも相談の上、保護を続けることにした。しかし、その大きさや動きの活発さから、マンションで共に暮らすのは1か月が限界だった。最終的には保護者を私の両親に変更し、引き取ってもらうことになった。保護し続けることが良かったのかどうかは今もわからないが、両親に大層可愛がられ、また本人（本鳥？）も伸び伸びと暮らしていたことは幸いであったと思う。

数年後、昆虫の展示を「見に」行ったはずの夫がクワガタを購入して帰ってきた。憧れのオオクワガタを見て、我慢できなくなったらしい。飼うくらいなら問題ないだろうと思っていたら、甲虫専門雑誌を読むうちに、試しにブリードしてみたいと言い出した。しぶしぶ了承したところ、想定を遥かに超えて増殖し、最盛期には幼虫・成虫含めておそらく千匹以上になっていたと思う。自宅の一室にはズラリと菌糸瓶（幼虫飼育のための瓶）が並ぶ。虫が苦手な義弟はこの部屋を「インセクトルーム」と名付け、決して足を踏み入れなかったほどである。この数を首都圏のマンションでブリードするのは珍しいとのことで、テレビ番組の取材を受けるという得難い経験もした。

その次はウサギを拾った（夫が）。大晦日に、自宅マンション前の公園で2羽のウサギが遊んでいたが傍に飼い主らしき人はいない。どうも

誰かが放置したものだと思われ、見捨てられなくて連れてきたのだ。マンションは小動物の飼育は認められていたし、何よりもう拾ってきてしまったのだから飼うしかないと思った。それまでオオクワガタを可愛がっていた娘は、毛がフワフワで触ると温かい動物に大喜びし、クワガタ以上に熱心に面倒を見ていた。

ウサギは2羽とも拾った時には既に成体となっており、5年ほどで相次いで寿命を迎えた。ほぼ同時期、業務繁忙のためオオクワガタの飼育も難しくなってきた。夫が改良した血統は、大きさと形的美しさが共存していると評判が良く、幼虫・成虫とも同好の士に引き取ってもらうことができた。今もこの血統は続いており、検索すると動画などが見つかる。血統を繋いで下さっている方にはお礼を申し上げたい。

さて、ウサギもクワガタもいなくなり少し寂しく思っていた頃、夫が何かを後ろ手に隠して帰宅してきた。職場の近くのホームセンターでセキセイインコを見かけ、昔を思い出して飼いたくなったのだ。初めに幼鳥を2羽、1か月くらい後に売れ残っていた成鳥の番、少しして幼鳥をさらに1羽追加と、瞬く間に5羽のインコと暮らすことになった。インコはカラスに比べて格段に小さく、頭や肩に乗ってきた時に、あまり重くも痛くもないのは驚きであった。その後、番から産まれた卵のひとつが無事に孵化し、一番多い時は6羽となった。現在は2羽に減ってしまったが、出来るだけ長く元気でいてほしいと思う。

振り返ってみると、我が家で生き物を飼うことになるトリガーは、すべて夫である。しかも、いつも拾ったとか衝動的に購入するとか、予期せぬ時にやってくるため、泥縄で飼育法を調べることになる。仕方ないなあと受け入れる私も悪いのかもしれないが、もしもこの先、新しく生き物を飼う機会があるとしたら、家庭内で十分に相談をした上で、予め下調べをし、万全の体制を整えてから迎えてみたいものである。